

エッリコ・マラテスタは、一八五三年十二月十四日、イタリアのカゼルテ州で、田舎の傾ましい地主の一家族の子として生まれた。十四歳になるとすぐ、彼は、国王ヴィットリオ・エマヌエレ二世にあてて、無礼な威嚇的な手紙を書く。そのため逮捕される。ナポリで、彼はエスコラベス教団の宗教学校で学び、ついで医科大学で学んだ。共和主義者になり、その後マツィーニの保護を拒否し、バリ・コミューンのほんの幾月かあとで、彼は一八七一年にインターナショナルに加盟し、そこでバクニン派に合流する。一八七六年十月、「反権威主義的」インターナショナルのベルン大会で積極的な役割を演ずる。この大会で彼は、バクニンのイデオロギーの遺産からいくらか離れて、「集産主義」を放棄する。それは、「自由共産主義」の宣伝者となるためであり（I巻三五九ページおよび二七〇ページを見よ）、また「事実による宣伝」の思想を打ちだすためであった。以来、マラテスタ、カルロ・カファイエロ、クロボトキンは手を結ぶ。

一八七七年に、ベネヴェント州で、マラテスタとカファイエロ

## エッリコ・マラテスタ 1853 - 1932

は、ブランキ主義的な方法による彼らの行動主義の実験を試みる。武装し、赤旗をかかげた、三十人ばかりのインターナショナル会員の先頭に立って、マラテスタとカファイエロはレンティノの村を占領し、住民に武器を分配し、公文書を焼いた。しかし、住民は受身のままでとどまり、軍が介入する。マラテスタとカファイエロは、その場で逮捕される。裁判では、憲兵を撃つことを認めたにもかかわらず、マラテスタは、マルセイユからジュネーヴに赴く。そこで彼は、クロボトキンとともに新聞『叛逆者』の編集に参加する。スイスから、ついで他の多数の国から追放され、遂にロンドンに定住して、つまらぬ職業をあれこれとやってみる。

一八八一年に、アナキストたちは、国際大会のためロンドンに参集した。マラテスタはそこでアナキスト・インターナショナルの創設を提案するが徒勞であった（二二ページをみよ）。イタリアでは、彼は革命的行動を再開することができた。そして、そこで二つの新聞を創刊する。反愛国的な、反議会主義的

な傾向の、「社会問題」と「無政府主義」である。しかし間もなく、弾圧が改めて彼を襲った。政治裁判の最中に、彼は、南アメリカに向けて積み込まれたミンケースに入って首尾よく逃亡する。やがて彼は、「純粋にアナキスト的な基礎にもとづくインターナショナルの再組織計画」を公表する。

一八八五年には、彼はブエノス・アイレスにいる。そこで、別の「社会問題」を発行し、組合運動の組織者となる。一八八九年、数多くの信じられないような冒険のうち、彼は南アメリカを去り、フランスへ、ついでイギリスへ、ついでスペインにゆく。この疲れを知らない小男は、東奔西走して止まない。ロンドンで、一八九六年に、マラテスタは、スペインのアナルコ・サンジカリストの代表として、社会主義労働者インターナショナル大会に参加する(二二ページを見よ)。

密かにイタリアに戻ると、彼は、同時に、議会主義、個人主義、マルクス主義と闘い、クロボトキンからも離反し、その「自発主義」を批判した。彼は、アナキズムを党派に組織する必要を固執し、そして、サンジカリズムとともに労働者の直接行動の弁護人となる。

しかし、新しい冒険が彼を待ち受けていた。イタリアの島々に流刑にされた彼は、一八九九年に脱走し、イギリス、ついでアメリカ合衆国に、ついでキューバにゆき、一九〇〇年にはロンドンに戻る。そこで、沢山の新聞を発行する。「インターナショナル」、「ゼネラル・ストライキ」などである。

一九〇七年に、彼は、アムステルダム、アナキスト国際大会(二九ページを見よ)に積極的に参加する。彼がイギリスを離れてイタリアに帰ったのは一九二三年になってからのことであつた。彼はそこで、当時左派の社会主義者であり、新聞「ア」に強力であつたファッシストの黒シャツは、運動を粉砕する。「ローマの進軍」のほんの少しあとで、「ユマニタ・ノーヴァ」紙は禁止され、マラテスタの肖像が公衆の面前で焼かれた。しかしながら、彼は一九二四年に、月二回刊の雑誌「思想と意志」を刊行するのに成功する。それは、しばしば激しく非難されたにもかかわらず、一九二六年まで生きのびた。彼はそれに、高度に円熟した記事を書く。

一九二六年の末以来、(彼が外国に持ちださせることができなかつた若干の記事を除いて)ファッシスト全体主義に沈黙を強いられた、年老いたマラテスタは、監視付きの住居で暮らす。それで彼は、彼が希望したように、スペインにおける一九三一年の共和主義革命に合流することができなかった。彼は、一九三二年七月二十二日に死んだ。

ヴァンティの責任者であつたムッソリーニに会う。彼は、彼には社会革命の展望にすでに懐疑的であると見えた、未来のファッシストの「統領」と長い討論をする。彼は、友であるルイジ・ファブリに、この男は単に紙の上だけで革命的だ、この男とは何一つともなすべきことはない、と打ち明けている。

アンコーナで、マラテスタは新聞「意志」を発行する。それは、彼がすでにロンドンから刊行を促進させていたもので、そこで彼は倦むことのない煽動家であることを示す。一九一四年六月、彼はこの地で「赤い週間の起爆剤となる。武装を解除されたデモ参加者に対する警察力による虐殺につづいて、暴動が勃発する。民衆が市を占領する。諸組合は、全国的にゼネラル・ストライキを指令する。軍が介入する。マラテスタは、逃亡し、イギリスに戻らねばならなかった。

第一次世界大戦に際して、彼はプロレタリア国際主義に忠実であることを示す。憤然としてクロボトキンの好戦主義と闘う。一九一九年の末、彼はロンドンを離れてイタリアに帰ることができ、そこで熱狂的な群衆に歓迎される。「コリエレ・デッラ・セーラ」紙は、彼を「イタリア社会における最も偉大な人物の一人」として描く。彼の新聞「ユマニタ・ノーヴァ」は、五万部を発行する。そして、彼は、アナルコ・サンジカリストの中核、イタリア組合同盟(U・S・I)の中心活動家となる。

一九一九年から一九二三年にかけて、マラテスタは、革命の闘士、煽動家としての彼の生涯の絶頂を経験する。彼は、彼の新聞をローマに移す。そして、諸政党、諸組合とともに反ファッシズム「労働同盟」を形成するよう努力する。同盟は、一九二二年七月、ゼネラル・ストライキを宣言する。しかし、すで

## 革命と反動

革命、それは、新しい生き生きとした制度の、新しい結合の、新しい社会関係の、創造である。それはまた、特権と独占の破壊である。それは、新しい正義の、友愛の精神であり、大衆の直接的な意識的な行動を通じて、彼ら自身の未来を確保するよう彼らに促しながら、あらゆる社会活動を、道徳の水準を、大衆の物質的条件を一新するはずの、自由の精神である。

革命、それは、そこで働いている人々による、公衆の利益をも彼ら自身の利益をも守る形での、あらゆる公共事業の組織である。

革命、それは、あらゆる束縛の廃止である。それは、集団の、コミュニティの、地方の、自治である。

革命、それは、人間的友愛にもとづく欲望による、個人的なまた集団的な利益による、生産と防衛の必要による、自由な連合である。

革命、それは、人々の間に存在している、あらゆる種類の、思想、希望、趣味にもとづく、無数の自由な集団の建設である。

革命、それは、コミュニティや地方や国を代表してい

る、幾千ものセンターの増殖である。このセンターは、立法権を持つことなく、人々の欲望や利害を、遠近にかかわらず周知させ調整するのに有益であり、人々の情報と勧告と模範によって行動するものである。

革命、それは、行動のつぼの中に浸された自由である。この自由は、独立が持続するかぎり持続する。すなわち、大衆を襲う疲労や、あまりに大きな希望、ありうる誤ち、人にありがちな欠点、に伴う失望を利用して、他のものが、徴兵したあるいは傭兵した軍によって支えられる、法を課して、運動をそれが存在していた地点で固定させる、権力を建設するまでであって、それは反動が始まる時である。

### 権威を持たぬ組織<sup>1)</sup>

権威主義的な教育を受けその影響の下で、権威が社会組織の中核であると信じて、あるアナキストたちは、権威と闘うために、社会組織と闘い、それを否定した……。組織に敵対するアナキストたちの基本的な誤りは、組織は権威なしにはありえないと信ずること、ひとたびこの仮説を認めるや、ほんのいくらかの権威を受け入れるよりもむしろ、あらゆる組織を否認することを選ぶこと、にあった……。もしわれわれが、権威のない組織はありえないであろう、と信ずるとすれば、われわれは権威主義者となるであろう。なぜならば、われわれは、生活を

せ組織し合うべき、多くの個人たちの無能の結果であった。アナキズムは、この事態を、いかなる種類の権威もなしに、つまり、いかなる個人も他者に対して自分の意志を強制する権利を持つことなく、提携者たちの自由な意志によって創設され維持される、自由な組織の基本的原則によって救済するものである。したがって、アナキストたちが、その原則、彼らによれば、全人類社会がそれにもとづくべき原則を、彼らの個人的な生活に、彼らの党派の活動に適用しようと努めるのは自然なことである。

いくつかの論争は、あらゆる組織にしたがおうとしないうアナキストたちがいることを前提にしている。しかし、実際には、われわれがこの点について行なった、数多くの、あまりにも数多くの討論は、それらが言葉の問題によって曖昧であるか、人の問題によって悪意で歪められている時ですら、実は、組織の原則ではなく、組織の形態にしか、かかわっていないのである。そんなわけで、言葉では組織に最も反対する同志たちも、彼らが真剣に何ごとかをしようとする時には、他の同志たちのように、そしてしばしば他の同志たちよりも見事に、組織し合うのである。

不可能なものとする組織不在よりは、生活を阻害しめじめなものとする権威を、まだしも選ぶであろうからである。

### 組織の必要性について<sup>2)</sup>

組織は、協力と連帯とを実践化したものにほかならない。それは、社会生活にとって自然な、必要な条件である。それは、人間社会全般においても、到達すべき共通の目標を持つあらゆる人間の集団においても、全員に課せられる避けられない事実である。

人間は、孤立して生きることを望まないし、孤立しては生きえない。社会の中で同類たちとの協力をえてでなければ、真に人間になることも、物質的、精神的な欲求を満たすこともできない。したがって、自由に組織し合わないすべての人々は、彼らにそれができないにせよ、彼らが組織の切実な必要を感じないにせよ、他人の労働を自分たち自身のために搾取する目的で、一般に支配的階級ないし集団を形成している他の個人たちによって打ち立てられた組織を、堪え忍ばねばならないということは、不可避的である。

そして、特権を持つごく少数者による千年にもわたる圧制は、常に、生産するために、業しむために、また時には搾取者や圧制者から身を守るために、他の労働者たちとの利害と感情との共有をもとにして、意見を一致さ

### アナキー<sup>3)</sup>

アナキーという言葉は、ギリシャ語に由来していて、政府のないこと、組織された権威なしに・政府なしに・自らを統治する民衆の状態、を意味している。

一群の思想家たちが、そのような組織を可能なもの、望ましいものと見なす以前は、それが、近代社会闘争の最も重要な因子の一つである党派によって、目標としてとりあげられる以前は、アナキーという言葉は、一般に無秩序、混乱の意味にとられていた。今日でもなお、無知な大衆や、真実を隠そうとしている敵対者たちによって、その意味で扱われている。

人々は政府を必要と信じたので、人々は政府なしには無秩序と混乱しかありえないと信じたので、政府の不在を意味するアナキーという言葉が、秩序の不在をも意味するのは、自然なことであり、論理的なことである。

こうした事実、言語の歴史の中では例のないことではない。民衆が唯一者の政府(君主制)の必要を信じた時代や国においては、大多数の政府を意味する、共和という言葉は無秩序と混乱の意味で用いられた。この用いられ方は、ほとんどあらゆる国の大衆的な言葉の中に今

なお見出される。

世論を転換させよう。政府は単に必要でないばかりではなく、さらにそれはこの上なく危険なものであり有害なものであると、公衆に納得させよう。その時、アナキという言葉は、まさしく、それが政府の不在を意味するので、すべての人々にとって、自然な秩序、全員の欲求と利害との調和、連帯の中の完全な自由、を意味することとなる。

人々は、アナキストたちは彼らの名称の選択に誤った、なぜなら、その名は大衆から正当に理解されないし、誤って解釈されがちである、というが、それは間違っている。誤ちは、言葉にはなく、実態にかかっている。アナキストたちが宣伝の中で逢着する困難は、彼らが自らに与えた名にかかっているのではなく、彼らの觀念が、民衆が政府の役割について、あるいは、一般にそういわれているように、国家について抱いている、宿年のあらゆる偏見に衝突する、という事実にかかっているのである。

政府とは何か？

形而上学的な傾向（それによって、人間が、存在の特質を論理的過程で抽象化したのち、彼に現実に対する抽象化を強いる、一種の幻覚を耐え忍ぶという精神の病いである）形而上学的な傾向は、実証科学による淘汰にもかかわらず、現代の大半の人々の精神の中にも今なお深い根を下しており、政府を、政府に属している人々から

独立した、理性と正義と公平という若干の属性を付与された、道徳的中核である、と多くの人々に思わせているのである。

そう思っている人々にとって、政府は、あるいはむしろ国家は、抽象的な社会的権力である。それは、つねに抽象的な、全体の利害の、代表者である。それは、各自の権利の限界と見なされる、全員の権利の表現である。政府についてのこのような考え方は、権威の原理を救うこと、次々と交代する権力を行使する人々の誤りや過失よりも権威の原理を生きのびさせることが、自分たちにとって重要である、と思っている人々によって支持されている。

われわれにとって、政府、それは、統治者たちの集団であり、統治者たち、王、大統領、大臣、代議士等々は、彼らの間での人間関係を調整する法を制定し、その法を執行し、税金を命令し徴収し、兵役を強制し、個人的契約を監視し承認し、いくつかの生産部門といくつかの公共事業、あるいは、彼らがそれを望むなら、あらゆる生産とあらゆる公共事業とを独占し、製品の交易を奨励するか妨害し、戦争を宣告するか他国の統治者たちと講和をとりきめ、特権を承認するか取り消す、等々のことをすることを意のままにする人々である。統治者とは、一言でいえば、彼ら自身の望んでいることをすべての人々に強いてさせるために、社会的な力、つまり全員の肉体的、知的、経済的な力を、いずれにせよ高度に、

意のままに使うことのできる人々である。この随意さが、われわれの考えでは、政府の原理、権威の原理の本質をなしている。

しかし、政府の存在理由とは何か？

われわれ自身の自由、われわれ自身の発意をなぜいく人かの個人の手中に譲りわたすのか？ 各自の意志によって、あるいはそれに反して、全員の力を奪い、それを彼らの勝手にさせる随意さを、なぜ彼らに与えるのか？ 彼らは、若干の理性的な見かけによって、大衆にかわりうるほど、また、当事者たちがなしうる以上に人々の利害の面倒を見うるほど、例外的に才能に恵まれているのか？ 彼らは、人々が各自と全員の運命を慎重に彼らの善意に委ねうるほど、絶対に誤つこともなく腐敗することも無いのか？

歴史の上では決して立証されなかった、そしてわれわれが立証することは不可能である、と信ずる仮定に立って、限らない善意と知識を持つ人間が存在し、統治する権力は、最も有能なもの、最良な人に帰属する、とした場合でさえ、権力の保有は、彼らの奇特な力に何一つ付け加えないであろう。あるいはむしろ、彼らが理解していない多くの事柄に専念せざるをえず、特に、権力を維持するために、友人たちを満足させるために、不平分子を抑えるために、叛逆者たちを打ち破るために、彼らのエネルギーの最良の部分を浪費せざるをえないという必要によって、それを麻痺させ、それを破壊することに

なるであろう。

それにしても、よいものなのかわるいものなのか、聡明なものなのか無知なものなのか、どうなのであるのか、政府は？ 誰が政府をその高い職務に任命するのか？ 政府は、戦争の、征服の、あるいは革命の権利によって、それ自身自らを規制しているのか？ しかし、政府が全体的な利益にもとづいているとするなら、民衆にはいかなる保証があるのか？ これは、まさしく寡奪の問題である。臣民にとっては、彼らが不満であるとすれば、くびきから解放されるためには、力に訴えることしか残されていない。政府は、一階級、一党派によって選ばれているのではないか？ そして、勝利を取めるのはその階級の利害であり思想であり、その時、他のもの意志や利害は犠牲にされているのである。政府は、普通選挙によって選出されているのか？ しかしその唯一の基準となるのは、公正さも理性も力柄も確かに示しえない、数である。選出されるのは、大衆をうまくだましている人々であり、選ばれたものが少なくとも多数派の真の代表となるような、選挙の機構を見出すことが不可能であることを、経験がすでに証明していることはさておいても、過半数にやや足りない少数派は、犠牲にされるわけである。

人々が政府の存在を説明し正当化しようとした理論は、数多いし多様でもある。それらのすべては、要するに、明らかにされているにせよいかにせよ、人々は相

いれない利害を持っており、敵対している利害をできるだけ調整する、最小限の犠牲で最大限の満足を各自にもたらすような、そうした統治の規則を制定し強制しつつ、ある人々に対して他の人々の利害を尊重させるために、上位にある外的な力を必要とする、という先入見にもついているのである。

もし、ある個人の利害、性癖、欲求が、他の個人のそれらと、あるいは、全社会のそれらとさえ対立しているとするれば、その当の個人に対して、誰が他の人々の利害を尊重するよう強制するか、権利や力を持っているのか、と権威主義の理論家たちはいう。全体の意志を侵害するような市民を、誰が妨げうるのか？ 各自の自由は限界として他者の自由を持つ、と彼らはいうが、しかし、誰がその限界を樹立し、それを尊重させるのか？ 利害と情念との自然な対立が、政府の必要を生みだし、社会闘争の中での調節機を自任し、各自の権利と義務の限界を設定する、権威を正当化するのである。

そうしたものが理論である。しかし、理論は、正当であるためには、事実にもとづき、事実を説明しえなくてはならない。人も知るように、社会経済においては、あまりにもしばしば、理論は、事実を正当化するために、いいかえれば、特権を擁護し、その犠牲となる人々によって静かにそれが承認されるために、作りだされているのである。

むしろ事実を見ていこう。

多くの国で、プロレタリアートは、表面上、政府の選挙に多かれ少なかれ広汎に参加している。選挙は、王が貴族の権力に対する闘争において民衆の協力を獲得するためか、民衆に主権の見せかけを与えて、自己解放の思想から民衆の注意をそらせるための、ブルジョアジーによって行なわれた譲歩である。

ブルジョアジーがそう予想していたにせよしていなかったにせよ、彼らが民衆に投票権を譲歩して以来、この権利がまったく幻影的なものであって、権力に到達するという幻影的な希望をプロレタリアートの最も精力的な部分に与えながら、単にブルジョアジーの権力を強化するのに適したものであることを示したのは、確かなことである。

普通選挙を伴ってさえ、われわれは特に普通選挙を伴って、といえるが、政府は、ブルジョアジーの奴隷であり憲兵としてある。事情がそうでないとしたら、政府が敵対的なものになるとおどしていたら、民主主義が民衆をだます手段以外の何ものかでありえたとしたら、利益をおびやかされたブルジョアジーは、叛逆に備えたことであろうし、彼らのための単なる憲兵の役割に政府を引き戻すために、富の所有が彼らに与える、あらゆる力とあらゆる影響とを役立てたことであろう。

あらゆる時代において、あらゆる場所において、政府が用いた名称が何であろうと、その起源やその組織がどんなものであろうと、その基本的な機能は、つねに大衆

あらゆる歴史の課程において、現代におけるのとまったく同様に、政府は、あるいは、大衆に対するいく人かの、兇悪な、暴力的な、勝手な支配であり、あるいは、民衆を隷属状態におき、彼らを自分たちのために働かすために、すべての生活手段、特に土地を、力によって、策略か世襲によって独占した人々に、支配と特権とを保證するために、調整された手段である。人々は、二つの方法で抑圧される。直接的に、兇暴な力によって、物理的な暴力によってか、間接的に、生活手段を取り上げながら、そうして無気力に追い込みながらか、である。第一の形は、権力の、つまり政治的特権の原因であり、第二のものは、経済的特権の原因である。

人々はさらに、知性や感情に働きかけられながら抑圧される。それが、宗教的ないし「大学における」権力を形成するものである。しかし、精神は物質的な諸力の結合から由来したものにほかならないので、虚言とそれを普及させるための法人は、それらが経済的、政治的特権の結果であり、それらを擁護し強化するための手段であるという範囲でしか、存在理由がないのである。

今日、財産所有者とその使用人からなる政府は、まったく財産所有者たちの意のままになっている。それは、最も富んでいる人々が政府に加わることを潔しとしないほどに、そうである。ロスチャイルドは、代議士でも大臣でもある必要はない。彼は、代議士たちと大臣たちを意のままにすれば足りるのである。

を抑圧し搾取し、抑圧者と独占者とを擁護する機能である。その、主たる、特徴的な、欠くべからざる代行者は、憲兵であり、収税吏であり、兵士であり、牢番であり、彼らに対しては、人々を隷属させ、素直にくびぎにつなげられているようにさせるために、政府から支払われ保護されている、虚言の商人、僧侶か教授が必ず結合している。

政府は、全体の利益という口実の下に、その本質を覆いかくさなくては、長く存在することができない。政府は、全員の生活を尊重するという様子を見せることなしには、特権者たちの生活を尊重させることができない。政府は、全員の権利を保護するふりをするとなしには、いく人かの人々の特権を認めさせることはできない。「法は」すなわち、法を、あるいは政府を作ったものたちは、とクロボトキンはいっている。「法は、人々が当然反抗すべきはすの掠奪者である少数者たちに役立つ秩序を、人々が受け入れている道徳の掟を課しつつ認めさせるために、人々の社会的感情を利用したのである」

政府は、社会が解体することを望みえない。なぜなら、その時、政府にとって、支配階級にとって、搾取すべき材料が消滅してしまうからである。政府は、公的な仲立ちなしに社会が自ら自己を統治することを許すことができない。なぜなら、その時、民衆は、政府が何一つ役立たないこと、そうでなければ、彼らを飢えさせる財産所有者たちを擁護するのに役立っていることに、すぐ

さまざまづくであらうし、政府と財産所有者たちを追払うよう決意するのであらうからである。

今日、プロレタリアートの激しい威嚇的な要求を前にして、政府は、経営者と労働者との間の関係を仲裁する傾向にある。政府は、そのようにして、労働運動を歪曲させ、いくつかの欺瞞的な改革によって、貧しいものが彼らが必要としているすべてのもの、つまり、他のものが享受しているのと同じだけの安楽を彼ら自ら獲得することを、妨げているのである。

その上、一方では、ブルジョアたち、つまり財産所有者たちも、彼ら自身が絶えず戦いつつあり、互いに食い合いつつあり、他方では、政府は、ブルジョアジーの息子であり、奴隷であり、保護者であるにもかかわらず、すべての隷属者同様に、自己を解放しようとしており、すべての保護者は、被保護者を支配しようとしている、ということを考えていれる必要がある。そこから、シーソーゲームが、引張りあいが、認められ取り消されたりする譲歩が、民衆に対する保守主義者間の同盟者探し、統治者の知恵であり、上からの救済をつねに待っている愚直な人々や怠け者をあざむく術策が、生まれる。

政府は、あるいは人がそういうように、社会闘争の裁判者、調整者であり、公衆の利害の公平な管理者である「国家」は、虚構であり、幻覚であり、決して実現されなかつた、決して実現しようことのない、空想である。

し、ますます緊密な有効なものになるであらう。

社会的な本能、連帯の感情は、最高度に發展するであらう。人間各自は、愛の感情を満たすためにも、十分理解できる利益のためにも、他の人々の幸福のために彼がなしうるすべてをするであらう。

自分たちの欲求と共感とにしたがった、人間たちの自発的な集団に助けられた、最も直接の利益から出発し最も全般的なものに達する、単純なものから複雑なものへの、下から上への、全員の自由な協力から、全員の最大の安楽と最大の自由を目指す、全人類を一つの友愛的な社会に抱きとる、変化や状況や経験の教訓にしたがって修正され改善される、社会組織が立ち現われるであらう。

この自由な人間たちの社会、この友人たちの社会、これが、アナキーである。

しかし、政府は、それ自体としては、特権階級を形成しない、それは、全員の代表者として、人が望むならば奴隷としてとどまりながら、周りに特権者の新しい階級を創設しないで存続しうる、と仮定してみよう。その時、政府は何の役に立つのであらう。政府は、現に社会に存在しているはずの、力を、知性を、連帯の精神を、全員と未来の人類の安楽への配慮を、何のためにいかに増大するのであらう。

それはつねに、自分に対する束縛にもかかわらず首尾よく生きることできた、束縛を生存の必要条件と見な

もし、人々の利害が相互に対立するはずのものであったなら、人間同士の闘いが人間社会に必要な法則であったのなら、ある人々の自由が他の人々の自由の限界でなければならなかつたのなら、その時各自は、他の人々の利益よりも自分自身の利益を打ち勝たせようとするのである。各自は他人の自由を犠牲にして自分の自由を増大させようとするであらう。もし政府が必要であったとすれば、それは、社会の構成員全体に多かれ少なかれ有益だからではなく、そうではなくて、勝利者たちが、敗者たちを確実に服従させつつ、勝利の果実を確保することを望み、憲兵という職業のために特に訓練された人々に防衛を委任しつつ、たえず防衛の立場におかれる負担からのがれることを望んだからであらう。……

今日、生産が示している無限の發展、あらゆる国の歴大な人々の協力によってしか満足させられない欲求の増大、コミュニケーションの手段、旅行の習慣、科学、文学、商業、戦争すらもが、つねにより以上に、人類を一体化させたし、一体化させつつある。その、相互間で連帯している各部分は、他の部分や全体の救いの中でしか、自己の完全さや發展の自由を見出せないのである。

政府の廃止は、社会的結合の破壊を意味するものではないし、意味するはずがない。まったく反対に、今日では強制されている、今日ではまったくある特定の人々の利益のためのものである、協力は、自由な、自発的な、直接的なもの、全員の利益のためのものとなるであらう。

している、束縛された人間の陳腐な作り話である。

われわれは、自分の目的のために導きうる、そして、自分にとって無益か敵意あるものを妨害し、麻痺させ、抹殺する、あらゆる力、あらゆる知性、あらゆる意志を独占する、政府の下で生きること慣らされている。そして、われわれは、この社会においてなされるいっさいは政府の所業であり、政府なしには社会にはもはや力も知性も意欲もない、と思ひ込んでいる。そんなふうにして、土地を奪った財産所有者たちは、自分たち固有の利益のためにそれを耕作させるのであり、労働者には、労働をつづけることができ、またそれを望むための、絶対的に必要なものしか残していないのであって、——奴隷化した労働者は、あたかも経営者が土地や自然の力を創りだしたかのように、経営者なしには生きることができないと考えているのである。……

政府の存在は、われわれの仮定によれば、それが権威主義的社會主義者たちの理想の政府であつたとしても、社会の生産的な、組織的な、保護的な力を増大させるどころか、発意のある特定の個人々に限定しつつ、その特定の人々に、もちろんすべてを知る才能を与えることはできず、すべてをする権利を与えつつ、それら社会の諸力を著しく弱めるであらう。

事実、もしあなた方が、立法から、政府のあらゆる仕事から、特権を擁護するためのものと理解される、特権者たち自身の意志を代表するいっさいを取り除いたとし

たら、全員の活動の成果以外の、何が残るであろうか？  
しかも、社会が政府なしにいかにかきうるかを理解するためには、現行社会をいくらか十分に観察すれば足りるのである。人は、実際には、社会生活の最も大きな部分、最も基本的な部分が、今日においても、いかに政府の介入の外で果たされているかを見るであろうし、また、政府が介入するとしても、大衆を擁護するために、特権者たちを擁護するために、さらには、政府なしに、政府に反して行なわれるいっさいを、まことに無益にも処罰するためだけであることを見るであろう。

人々は、働き、交易し、学び、旅行し、彼らが望むように道徳や衛生の規則にしたがい、科学と芸術の進歩を利用し、身の処し方を彼らに強制する誰かの必要を感じることなく、彼ら相互の間で無限の関係を保持しているのである。そして、まさしく政府が干渉しないこの事態こそ、最善が行なわれ、あまり紛争がない原因となり、全員がそこで自分たちの利益と楽しみとを見出すように、全員の意志に一致するのである。……

私はもう一度くり返しているが、政府は、法を制定し、かつ人々に服従を強制する権利と手段とを与えられるか手に入れた個人たちの総体である。管理者、技師等等は、反対に、仕事をする役目を与えられるか引き受けて、それをする人々である。「政府」は、権力の委任、つまり、全員の発意と主権とのある特定の人々への譲渡、を意味する。「管理」は、労働の委任、つまり自由

な契約にもとづいた、与えられ受け入れられた役目を、役務の自由な交換を、意味する。

統治者は特権者である。なぜなら彼は、彼の個人的な考えや欲望を実現させるために、他の人々に命令し、他の人々の力を使う権利を持っているからである。管理者、技術監督等々は、わかりきったことであるが、全員が発展するための平等な手段を持ち、全員が同時に知的労働者であり肉体労働者であるか、ありうる、すべて仕事、すべての機能が社会的利益を享受する平等な権利を与える、そんな社会に彼がかかわっている時、他の人々同様に、労働者なのである。本質的に異なっている、政府の役割と管理の役割とを混同してはならない。なぜなら、もし今日それらが混同されているとすれば、それが経済的、政治的特権のためであるからである。

しかし、アナキストではないすべての人々に、政府をそのために本当に不可欠なものであると見なさせているもの、社会の外的、内的な防衛、つまり、「戦争」、「警察」、「司法」の各機能について、急いで見てみることにしよう。

政府が消滅し、社会的な富が全員の意向に委ねられたとすれば、異国民の間での対立はすぐに消滅するであろうし、戦争はもはや存在理由を持たなくなるであろう。……

しかしながら、まだ解放されていない諸国の政府が、自由な国民をふたたび隷属状態に置こうとすることを望

み、それができるであろうことも認めよう。その自由な

国民は、自衛するために政府を必要とするであろうか？戦争をするためには、欠くことのできない地理的、技術的の知識を持った人間たちと、特に闘う気になっている大衆とが必要である。政府は、ある人々の力働を増大することも、他の人々の意欲や勇気を増大することもできない。歴史的経験は、自分自身の国を守ることを真に望んだ民衆が、いかに無敵であるかをわれわれに教えている。すなわち、イタリヤでは、(アナキスト的な組織)志願兵部隊の前で、いかにいくつかの王座が崩壊したか、強制されるか募集された人々からなる正規軍がいかに消滅したか、をすべての人々が知っている。

「警察」？「司法」？多くの人々は、憲兵、警官、判事がいなかったとしたら、各自は、隣人を殺し、侵害し、虐待するのにも自由であるうし、アナキストたちは、彼らの原理の名において、他人の自由と生活を侵害し破壊する、この奇怪な自由を人が尊重することを望むであろう、と思ひ込んでいる。彼らは、政府と私有を破壊したのち、統治者であり財産所有者である必要を感じている人々が、例の「自由」の尊重によって、一つまた一つと再建するのを、われわれが見逃しておくであろうと、ほとんど信じているのである。われわれの思想を理解するための、なんとという奇怪な方法か！確かに、そんなふうにして、肩をすくめながら、人々はわれわれの思想に反論する労をたやすくのがれるのに成功したのであ

る。

われわれのために、他の人々のために、われわれが望んでいる自由は、弱者の抑圧という形で宿命的に表現される、絶対的な、抽象的な、形而上的な自由ではない。そうではなく、利害の意識的な共有であり、自発的な連帯である、現実的な自由、可能な自由である。われわれは、「欲することをなせ」という格言を宣言する。そしてその中に、われわれはいわばわれわれの綱領を要約する。なぜなら、それを理解するのはたやすいことだが、われわれは、調和的な社会においては、政府のない所有のない社会においては、「各自は自分がしなければならぬことを欲するであろう」と信じているからである。……

もし社会革命への道を妨害しようとするならば、誤解がなかったとすれば、アナキキーは社会主義の同義語である、とわれわれは断言することができるであろう。